

■ 書 評 ■

渡部 真 [著]

『現代青少年の社会学——対話形式で考える37章』

関西大学 岩見 和彦

評者自身が現代社会の中で子ども期・青年期を生きるとしたら、きっと大いに悩むに違いない、そして巷間言われている様々な青少年「問題」を背負い込んであれこれとあがいている姿を想像してしまう。だから軽々に「いまどきの若者は」の類の言説には、安易にのらないし、のれない。一方、わが青春期の自画像と引き比べて「いまの若い連中はすごい」とその進化ぶりを特記することにもためらいを覚える。現代青少年の生のリアルをどう記述し、どう解釈するかをめぐる自らの研究のスタンスが定まらぬことが、つねに「作品」の意義を宙吊りにしてしまう。結局のところ、青少年研究に手を染める者につきまとうこうした「揺らぎ」の経験そのものを、同じ時代を生きる自分と若者の相互作用の現場に分け入って解析するという社会学的研究の実践として捉え返していくしかあるまい……。

こんな寝言を繰り返している者にとって、本書の、特に「私自身の考えとその根拠をはっきり記述すること」を最重要と考え、そのためには「対話形式」を採用することが適切だとする明快な編集方針はとても魅力的であったし、それに加えて著者の記述のスタンスにブレがない点にもある種のさわやかさを感じたこと

を、まず告白しておきたい。

本書は、3年余りに亘って「ユースカルチャーの現在」というタイトルで月刊誌（『看護教育』医学書院）に連載された36章分に、まとめとして書かれた終章が加わる形をとっている。「中学生から二〇代」の若者が現代社会と向き合う中で体験するであろう諸相のなかから37のトピックスを伐りだし記述・解説している。各章は8～9ページ仕立てと短いものの、自殺率、不登校、少年非行、有害図書、青年犯罪などの領域をはじめとして、職業選択、高校生文化、高等教育に関しては授業方法、学力低下、自画像、大学院問題などをカバーし、テレビや「遊び」の文化、親子関係、価値観の国際比較、さらには実力社会／属性社会、格差社会の議論も試みられるなど、じつに多様な内容が盛り込まれている。章の並びについては正直再考を促したいところではあるが、それぞれのトピックに関しては、総じて、適切に選ばれたテキスト・データ・資料などと著者の仮説を適宜往還させながら要領よく論点が整理されている。青少年社会学の問題群を鳥瞰すると同時に読者が関心を持つテーマをそこから見出していくための、また理論的思考の大切さを体得するための書として、推奨したい入門の書であることは間違いな

い。

著者の確かなスタンス、こう言ってよければ背後仮説が明確なのも本書の特色であろう。以前の編著『モラトリアム青年肯定論』（『現代のエスプリ』460号）のタイトルにも象徴されるように、それは、教育界やマスメディアが陥っている「青少年のマイナス方向への変質」を前提にした現代青少年の語られ方、教育空間における「社会化重視」への転調、「学校化」政策・管理的まなざしの行き過ぎを事実や自らが関わった調査データなどをもって論難し、あくまで「個性化重視」を軸にした「現代青少年を肯定しよう」との立場性だと言えよう。その意味で、全37章の論調は一貫している。さきにブレのなさを「さわやか」だと表現したのは、心情的には評者もそれに共鳴しているからである。

さらに、本書が気合の入った入門書であることは、随所に興味深い問題提起や新しい論点が埋め込まれていることから見てとれる。評者にとって最も興味深かったのは、プロ将棋の世界（第2章）と歌舞伎の世界（第3章）を対照させながら、お馴染みの実力（業績）社会／属性社会の議論を具体的にイメージさせ、そこに若者の活躍可能性の問題を読み取ろうとした部分である。この二つの世界は著者にとってもぞっこんの世界であるらしく、それだけにデータや事例が生きている。こうした研究の「個性」には新鮮な味わいがある。その他、「非行少年観」をめぐる研究者と報道関係者の見解の乖離（現場の記者の勉強不足）に関する指摘、「会社や役所に勤めること」と「一人

前になること」を結びつけて考える必要がなくなる社会への言及など、興味深い応用問題が、適所に頭出しされている。本書を通り一遍の入門書ではないと評する所以である。

ただ、どうしても気になる点がある。それは著者が「一冊全部を対話形式で通した本は、あまり例がない」として、サブタイトルにも使っている当の「対話形式」をめぐる点である。

著者は、当該雑誌の読者に対して一方的に語りかけるだけでは、読み進む中で読者が「え、どうして?」「もうちょっと、具体的に言ってくれないと!」と心の中で反応・反論しそうなことを、相方に発話させ、話の流れをよりスムーズにするために施した工夫のことを「対話形式」と呼んでいる。しかし、筆者(A)の相方として登場する「教育関連学部所属の大学生。二〇代。男子」(B)がこの「対話」のなかで発言するのは、本書の大半において1行ほどに過ぎない。しかも、「この本を読んで、どんなことを感じましたか?」「学生の評判はどうですか?」……といった「合いの手」的な文言がほとんど。仮想の人物とはいえ、彼は本当に「大学生」なのだろうか、これほどまでに従順で生真面目な聞き手、自分の考えを吐露しない（役回りの）大学生を登場させた意図やいかに、とつい頭を傾げてしまう。dialogueがtwo logos, つまり二つの論理の対峙を意味するといった語源をここで引き合いに出すことは見当違いなのかもしれないが、それでもやはりもう少し「対話」というコミュニケーション行為が引き起こす議論の展開・深化の過程そのも

のを文中に仕込むことはできなかったの
 だろうか。この違和感は再読後さらに膨
 らみ、著者の「若者を肯定する」スタ
 スとの齟齬が気になってしまうのであ
 る。もっともこうした物言いも、寝言人

■ 書 評 ■

佐藤一子 [著]

『現代社会教育学——生涯学習社会への道程——』

の「傷ついたプライドの補償作用」の現
 われと、著者には見抜かれるかもしれな
 いのだが。

◆ B 6 判 342頁 本体1,900円
 世界思想社 2006年9月刊

文教大学 野島 正也

評者は、大学院で教育社会学を専攻し、
 そこで研究者としての基礎的な訓練を受
 けた。調査研究のフィールドはずっと社
 会教育の分野だったので、佐藤一子氏の
 研究の足跡に目配りは欠かさなかったつ
 もりである。

評者は、社会教育分野の論文にはでき
 るだけ広く目を通すようにしているが、
 このごろの論文（と称するもの）には不
 満が多い。生涯学習の制度の解説、社会
 教育の実践事例の紹介、調査結果の微細
 にこだわりすぎた分析など。それ自身は
 悪くはないのだが、論者の問題意識や研
 究のスタンス、あるいは「社会教育」の
 とらえ方が見えてこないのである。

本著は、このようないまどきの傾向の
 どれにも当てはまらない。制度の解説、
 事例紹介、調査結果の引用は最小限にと
 どめ、それらを「注」にゆだねている。
 この本の中で行っている作業は、「社会教
 育」という制度がもつ特質を戦後に蓄積
 された理論研究と自身がこれまで実施し
 てきたフィールド研究をもとに明瞭に描
 き出すことであり、今後の発展の方向を

見定めることである。

評者がこの本に感じる魅力は、やや具
 体的にいえば、宮原誠一氏及び碓井正久
 氏在任時代から東大社会教育研究室を中
 心に進められた理論研究・調査研究が、
 著者の論述の強力なバックボーンになっ
 ていることである。読み進めるなかで感
 じたのは、著者がその中で育ち、また育
 ててきた研究集団の存在の重さである。

以下、本著で評者が注目した3点につ
 いて、順次述べたい。第1は、著者が、
 研究と実践をつなぐ方法として採用して
 きた「アクション・リサーチ」について
 である。

社会教育には、取り組むべきさまざま
 な実践的課題がある。著者は発展途上国
 の成人教育に目を向け、そこで要請され
 る主要な方法論として「アクション・リ
 サーチ」を取り上げている。それはまた
 著者の師である宮原誠一氏がつとに追及
 してきた方法論でもある。著者自身、こ
 の調査法をこれまでの数々のフィールド
 調査を通して練り上げてきた。

著者は、「アクション・リサーチ」の特